



市民活動の新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地ですそ野を広げている。ファイザー製薬ではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれず、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2001年度の助成対象となった各プロジェクト(左頁参照)を中心に、9回連続(今回は4回目)でレポートする。



養護学校に通うヒロ君(10)を車で迎えに行つて(写真右)夜まで森田さんたちと遊んだり、読書をしたりして、家庭的な雰囲気なかで過ごす。それぞれの生活状況に応じたきめ細かなサービスが行われている



利用者それぞれ生活状況にあわせて、きめ細かなサービスを提供する

サポート・ハウスはお障害児・者とその家族のための生活支援サービス促進事業(埼玉県)

障害者やその家族にとって生活上の悩みや苦しみは一生の問題であり、計り知れないものがある。特に介護をする家族の負担は重い。そうした障害児・者と家族のために、生活にあわせた多様なサービスで支援できないものかと立ち上げたのが民間事業所「サポート・ハウス」である。知的障害児の入所施設で働いていた森田真由美(40)さんと篠崎澄江(32)さんの二人が99年7月に設立し、現在、2名の非常勤スタッフと運営している。

「施設で生活する子供たちのなかには、自ら望んで家族と離れ、入所してきた子は一人もいなかったように思います。ショートステイの受け入れやデイケアを担当したりしましたが、利

用者はそれぞれ生活も要望も違います。緊急の時でも受け入れることができず、きめ細かな生活支援サービスの必要性を痛感しました」(森田さん)

「ばおと施設の大きな違いは、最初に登録をすれば、電話予約で24時間いつでもどこでも必要なだけ利用できることにある。タイムケア、送迎、派遣宿泊や食事の世話などサービス内容は幅広く、対象者の年齢や障害の程度、利用するための理由も一切問わない。家族の急用や急病、冠婚葬祭などで利用するケースがほとんどだが、最近では、今までできなかったことへトライしたり、生活の幅を広げるための利用が増えているという。

「利用者から『困った時の、ばお頼み』と言われたときは、とても嬉しかった。夜中の介護のため毎日1時間以



「ばおが地域の障害を持つ人たちにとって、なくてはならない資源の一つに」と語る森田さん(右)と篠崎さん

上連続して眠れないお母さんが昼寝ができた、結婚記念日に夫婦二人で久しぶりに出かけた、障害児のこ兄弟の運動会や授業参観に初めて夫婦で行ってきた、と喜ばれています。障害児・者の介護は一生なんです。そんな家族の方の休息の時間とリフレッシュのために利用していただいていることに、とても意義を感じます」(篠崎さん)

「ばおでは、障害を持つ子供と一緒にプールや遊園地に行ったり、カラオケやゲームセンターなど親と一緒にいけないところに友だち感覚で同行することもあるという。公的なサービスではなかなか補いきれない「すき間」の部分や、利用者が求める「痒いところ」に手が届くようなサービスを提供しているのがばおなのだ。

「処罰から治療へ」。回復への動機をつくり薬物のない人生への歩みをサポートする

フリーダム拘置所に収監中の薬物依存者へのインタベンション・プログラム(大阪府)